

秋篠月清集考

片 山 享

はじめに

藤原良経の家集“秋篠月清集”については定家本系統と教家本系統のあることが早く松田武夫博士によって指摘され、諸本の形態、内容から教家本系の旧大島氏蔵本（常縁筆本、古典文庫に翻刻されている）が、定家本よりも純粋に原形を髣髴せしめているものであることを考証され、¹⁾ 松沢智里氏も古典文庫解説において教家本の本文の優位性を論じていられる。こうして月清集に関しては教家本の優位性が確定したかのようであるが、果してそうであろうか、疑問なしとしないのである。そこで本稿では定家本と教家本を比較することによって両本の性格を明らかにし、二系統本に別れた経緯と両本の限界を考察し、この両本が後世どのように受容されてきたかという伝本受容の問題を考えてみたい。

1. 定家本・教家本の相違点

定家本と教家本は果して同一祖本から出たものであろうか。考察の手懸りとして定家自筆本²⁾と教家本（古典文庫本）の相違の大要を纏めて示すと次のようになる。

(1) 集組織の相違

定家本が「百首愚草」として花月百首以下句題五十首にいたる百首歌・五

1) 「秋篠清月集成立年代攷」（国語と国文学昭10・12）

2) 「定家珠芳」（昭42年印行）

十首歌を収めて一卷とし、「式部史生秋篠月清集」として春部より冬部までの四季部を上とし、祝部より釈教部までを下として一卷とする集組織をもつのに対して、教家本は書名を「式部史生秋篠月清集」に統一し、上に定家本の百首愚草の内容にあたる百首歌・五十首歌を収め、下に春部より釈教部に至る歌を部類して収めている。

(2) 合点の有無

教家本には定家本にない慈円・釈阿の朱墨点を付し、また歌合歌には勝負付がなされている。

(3) 本文異同 (ア)歌の出入り

次の歌は定家本になく教家本のみにある。(歌番号は古典文庫による)

野 遊

- 1 みやこ人やとをかすみのよそにみてきのふもけふものへに暮しつ (306)
夏 哥
- 2 うき枕夏のくれをやすゝむらむそま山川をおろすいかたし (1091)
旅月間鹿
- 3 わすれすよかりねに月をみやきのゝ枕にちかきさをしかの声 (1131)
寄歳暮恋
- 4 わすれすはあふよをまたん涙河なかるゝとしのすゑをかそへて (1294)
北野宮哥合時雨
- 5 むら雲にをくれさきたつ夜はの月しらす時雨のいくめぐりとも (1340)
北野宮哥合久恋
- 6 いそのかみふるの神杉ふりぬれと色にはいてす露も時雨も (1417)
夕 恋
- 7 なにゆへとおもひもいれぬゆふへたに待いてし物を山のはの月 (1444)
北野宮哥合忍恋
- 8 もらしわひこほりまとへる谷川のくむ人なしにゆきなやみつゝ (1464)

次の歌は定家本のみであり、教家本にはない。

秋のくれに

- 1 なか月のすゑはのゝへはうらかれてくさのはらよりかはるいろかな
(1266の次)

春のはしめに

- 2 あらたまのとしやかみよにかへるらむみもすそかはのはるのはつかせ
(1584の前に)

(イ) 歌の排列順序の異同

- 1 教家本82「ひとりねの」の歌は定家本では92の次にくる。
2 教家本1075「きく人の」の歌は定家本では1076「わきてなげ」の歌と順序が逆になっている。
3 教家本1488「わする^{れし}なと」の歌は定家本では「わすれしと」として1484の次にくる。

(ウ) 重出歌

秋部1205の次に定家本では教家本にない次の贈答歌二首がある。

内大臣の事侍けるころ無動寺法印のもとへつかはしける

とへかしなかけをならへてむかし見し人なきよはの月はいかにと
かへし

いにしへのかけなきやとにすむ月は心をやりてとふとしらすや

上の二首は無常部に

八月十五夜山法印のもとへつかはしける

- 1570 とへかしなかけをならへて昔みし人もなき世の月はいかにと
返し

- 1571 いにしへのかけなきやとにすむ月は心をやりてとふとしらすや

とあり、良経の歌の第四句が異なるだけで慈円の返歌は全く同一であり、重出歌と認められる。

(4) 詞書の異同

1. 定家本には1255「返事につけて詩ををくるとて」の詞書の下に教家本にない作者名「中宮大夫」を記す。
2. 定家本には祝部の終りに教家本にない「^茶入^番高陽院初度御会に」の詞書

がある。

3. 定家本には雑部「夢中述懐」の二首目の後に教家本にない「述懐」の詞書がある。
4. 定家本では哀傷部1567の詞書が
「なをありしかとも忘るおなしころ三位入道のもとより」
となっているが、教家本ではこの詞書は
「権中納言道家母うせたまひてのちおなしころ三位入道のもとより」
となっている。
5. 定家本には神祇部の「伊勢にて」の二首の後に教家本にない「述懐の中に」の詞書がある。
6. 定家本には神祇部の「日吉七社」の詞書の下に「本地」と記され、また教家本には歌題「大宮寮庭」「二宮寮庭」「聖真子向弥記」などのように定家本にない注記がある。（傍点筆者以下同じ）
両本の詞書の字句の異同は処々にあるが、例えば

定 家 本	教 家 本
院の撰歌合十首内霞隔遠樹	院撰歌合十首内霞繞樹
（実際の歌題は霞隔遠樹である）	
賭 射	賭 弓
同歌合に羈中花	羈中花
月歌五首よみけるに	詠月五首
こひのうたよみける中に	恋 歌

のように概して定家本の方が丁寧な詞書となっている。

(5) 題詞の異同および歌数注記

教家本には百首題に次のような注記がある。

哥合百首六百番

院初度御百首定治二年

院第三度百首千五百番哥合也

定家本では傍点を付けた注記はなく、ただ院第三度百首のみが次のようになっている。

院第三度百首

千五百番

また定家本には「治承題百首^{毎題五首}」の注記があり、また例えば「南海漁夫百首」を例にとれば次のような歌数注記がある。

春^{十五首} 夏^{十首} 秋^{十五首} 冬^{十首}

恋^{十五首} 羈旅^{十首} 山家^{十首} 述懐^{十首}

ただし述懐十首は実数は十五首で定家本のあやまりで、松平文庫本では十五首と注している。

以上が定家本・教家本両本の異同の大要である。これを手懸りに両本の性格を検討したい。

2. 定家本の性格

定家自筆本奥書には

是御平生之時所被注置之本也，夢後書留之，粗一見了，御本忿返上之間
不見中書之草，字誤無極不晴覚事不能直付，

安貞二年五月二日

とあり、定家本の成立経緯を知ることができる。すなわち石田吉貞博士、有吉保氏³⁾が推定されているように、定家は建永元年3月7日の良経の死後まもなく、良経手沢の自筆本「百首愚草」「秋篠月清集」を借りうけて書写した。安貞2年5月2日の日付は後年読みかえし、上の識語を書き付けたときのもので、奥書の内容からみて書写したときのものではない。書写の年次は不明であるが、「夢後書留之」という語気からみて良経の死後間もない時期で、建永元年中とみてよいであろう。

3) 石田吉貞著「藤原定家の研究」附載年譜。有吉保著「新古今和歌集の研究」附載年譜および和歌文学辞典年譜，また直接の御教示による。

定家本の性格を考えるうえで、まず注目したいのは(3)(ア)に記した両本の歌の出入りである。定家本は教家本にある八首の歌を欠いているのであるが、このうち野遊は六百番歌合春六首目の歌で、教家本では釈阿の朱点がついており、良経が釈阿に点を乞うた本にはあったわけで、定家書写の際の脱落歌と認められる。また旅月聞鹿の歌は建仁元年8月3日和歌所初度影供歌合六首の三首目の歌で歌題および排列は後鳥羽院御集・明日香井集によって確かめうるが、教家本でもその歌題および排列は同様であって秋初秋イ曉露・関路秋風・旅月聞鹿・故郷虫と並んでおり、六首中他の二首は恋部に初恋・久恋とも入っているから定家本の脱落とすべきである。同様に寄歳暮恋は正治元年冬左大臣家冬十首歌合の歌で歌題は壬二集、拾遺愚草によって確かめられ、教家本では寒樹交松以下寄歳暮恋に至る十首を排列しており、或いは冬部に恋歌が交っていることから故意に除外したとも考えられなくもないが、羈旅部「院より八幡若宮にて哥合ありしに六首内羈中恋を」（教家本「院より八幡若宮哥合六首内羈中恋」）の詞書があり、これは実際には「暮中暮」の題なのであるが、両本とも恋となっていて良経原本の誤記と考えられるが、定家はそのまま筆写しているわけであるから寄歳暮恋も故意に除外したのではなく脱落と考えられる。夕恋は建仁2年9月十三夜水無瀬殿恋十五首歌合六首目の歌で後鳥羽院御集・明日香井集(但し両書とも「暮恋」である)にあり、かつこの歌は慈円・釈阿両点をもつ歌であり、定家本の脱落と考えられる。

次に北野宮哥合久恋は新古今集入集歌で、新古今集卷十一恋歌一では詞書が「和歌所歌合に久忍恋といふことを」とあるもので、事実元久元年11月11日の北野宮歌合の歌ではなく、また歌の内容からも久恋ではなくて久忍恋の歌であり、新古今集の詞書の方が正しい。⁴⁾ 詠歌年次は不明であるが、月清集には新古今集入集歌は全て収めてあり、慈円・釈阿両点をもつところからも定家本の脱落とすべきである。

4) 「新古今和歌集全註解」で北野宮歌合に作者は列なっていないとする誤りは山崎敏夫氏が「藤原良経」（日本歌人講座中世の歌人Ⅰ）で正され、北野宮歌合の歌とされたが、この歌は北野宮歌合の歌ではない。

夏哥は教家本では

1090 ^{夏の日イ} たつ春をそれもをもくや思ふらんいはほなつなるあまのは衣

1091 うき枕夏のくれをやすゝむらむそま山川をおろすいかたし

と二首になっているものが定家本では

なつはなをそれもをそくやおもふらむそまやまかはをおろすいかたし

と一首になっているもので、定家本系統静嘉堂文庫本では

なつは猶それもをそくやおもふらん岩尾^{ナジ}夏なるあまのは衣

うき枕夏の暮をやすゝむらん柚やま川をおろすいかたし

とあり、定家本は教家本二首ではなく明らかに静嘉堂文庫本の二首の上三句と下句を合せて一首として誤写したものと思われる。とするならば静嘉堂文庫本が定家自筆本の原本の姿を示しているといえるわけで、実は静嘉堂文庫本には前述の定家本脱落歌のうち野遊・夕恋をも含んでいるのである。

ここで問題になるのは静嘉堂文庫本の性格である。同本は室町中期写、その奥書には

本云 是御平生之時所被注置之本也、夢後書留之、粗一見了、御本忿返上之
間不見中書之草、字誤無極不晴覺事不能直付

安貞二年五月二日

押紙曰

此一冊加愚見候之処、京極中納言定家卿真筆勿論候也

左羽林藤原為広 在判

とあって定家自筆本奥書の次に冷泉為広の極めをもつもので、本文内容からみても忠実な定家自筆本の転写本であるが、右にあげた外にもう一カ所、西洞隠士百首、春廿首の歌

かり人のいるののつゆをいのちにてちりかふ花にきゝすなくなり

で定家自筆本が下第五句の「きゝすなくなり」を欠いているのを補っており、あるいは静嘉堂文庫本はその転写の過程で定家本原本たる良経自筆本を見て補ったかもしれない。しかしもしそうとするなら前述の旅月聞鹿・寄歳暮恋・久恋三首も含んでいて然るべきだが、不審という外ない。松田博士に

よると、定家本系統には他に嵐行齋自筆本・大島氏袋綴本があるよしであるが所在不明であり、私家集伝本書目によれば東大研究室本もあるよしだが曝目の機を得ないので後考に俟つことにしたい。ともあれ、定家本からの転写本である静嘉堂文庫本が内容的にはかえって良経原本に近いものであることは注目すべきである。

ところで一番重要な歌の異同は元久元年11月11日の北野宮歌合の歌、時雨・忍恋二首を定家本が欠いていることである。

いったい月清集の部類をみるに、その排列は極めてルーズである。このことは前述の恋歌が冬部に入っている一事をもってしても明らかであるが、しかし詠歌年次順に書きとめていったものではなく、明らかに家集編纂の意図をもって部類し排列しているのである。すなわち春部は「はるたつ日ゆきのふりければ」一首に始まり、「三月尽日」一首に終る。秋部は「立秋」二首に始まり「九月尽日」二首に終るといったごとく部類排列になっているのである。もっとも同じ部立内では同時詠の歌は凡て一括して排列することを原則としており、そのために歌題排列に不調和が起ってくる場合もでてくるわけであるが、詠歌年次順に排列されたものではなく、一応部類排列となっているのである。

ところが月清集成立の上限をなす元久元年11月10日の春日社歌合三首および同11日の北野宮歌合三首の歌の排列をみると明らかにこれらの原則を無視して凡て各部の巻軸に排列されている。今両歌合歌のおかれた場所を示すと次頁の表の如くである。

次表のうち雑部のみは巻の中途にあるが後が述懐歌群を収めるので右に準じて考えてよいと思われるが、こうして両歌合歌はすべて巻軸に位置している。特に冬部と神祇部は部類が一応終った後に書き加えられたことが明瞭に観取されるのである。このことは月清集が元久元年11月10日以前に一応の部類を終っていたことを示すものである。そうすると良経が部類を行なった時期はいつ頃かという、春日社歌合以前で詠歌年次の最も近いものは元久元年「八月十五日夜五首五辻殿初度御会に」ならびに「八月十五夜翫月同当座

教 家 本	定 家 本
冬部（巻軸）	
1337 歳暮	歳暮に
1338 家撰哥合冬述懐	家撰哥合に冬述懐
○1339 院春日御社哥合三首内落葉	院於春日御社哥合の三首内落葉を
●1340 北野宮哥合時雨	（欠）
恋部（巻軸）	
1463 宇治にて院御会五首中夜恋	宇治にて院御会五首中夜恋
●1464 北野宮哥合忍恋	（欠）
羈旅部（巻軸）	
1487 院より八幡若宮哥合六首内羈中恋	院より八幡若宮にて哥合ありし六首内羈中恋を
1488 院影供当座に月前旅	（定家本この位置になし）
●1489 院にて当座御会旅	院にて当座旅心を
雑部	
1524 院より八幡若宮哥合六首内山家松	山家松 院より八幡若宮哥合後奉六首内
○1525 院より春日秋哥合三首内松風	松風 院より春日社にて哥合の三首内
1526 夢中述懐（十首）	夢中述懐（十首）
神祇部（巻軸）	
1588~1594 日吉社（七首）	日吉社本地（七首）
○1595 院春日社歌合暁月	院春日社哥合に暁月恋を

哥合」一首で、これらは秋部の中どころに一括して排列されていることからみて、部類は元久元年8月15日以後、同年11月10日以前ということになる。そして11月10日春日社歌合終了後にその三首を書き加えるのであるが、ここで問題なのは北野宮歌合三首中、定家本では時雨・忍恋二首を欠き、羈旅一首のみを「院にて当座旅心を」（教家本「院にて当座御会旅」という詞書で載せていることである。教家本では北野宮歌合時雨・忍恋が載っており、ここでは詞書に「北野宮哥合」と明示している。これはどのような事情によるものであろうか。

明月記、元久元年十一月十日の条に

十日、天晴、未時参殿、即御共参院、不終程出御、依召参和歌所、予依召

出勤仕講師，又付勝負字，如形書判詞，愁右筆注付之，四十五番評定了退
 又三首題当座詠之，此間掌燈，隱作者令結番，持參之後又依召參上，読之
 付勝負，天氣殊快然，有入興御気色，通具・有家・保季・雅経・丹後，以
 別御教書被感仰云々，面々捧之，自愛堪能之歌仙得境之秋也，深更御退出
 窮屈失度，

とあり，10日に行われた春日社歌合の様態を叙しているのであるが，この歌
 合後に当座三首題が出され，隱名歌合として結番し歌合が行われている。こ
 れが北野宮歌合である。「天氣殊快然，有入興御気色」は春日社歌合で秀歌
 が多くでて，それに引き続いたこの当座歌合にも院の御機嫌並々でなかった
 様子が叙されているわけで，この歌合の席上通具以下の人々に春日社歌合の
 御教書が与えられたのである。これが春日社歌合に対する御教書であった
 ことは家長日記によって明らかで，もっとも家長日記では御教書は後日与え
 られたことになっているが，日記の性質上明月記の記事を信すべきである。
 北野宮歌合は一般には11月11日とされるが，それは「北野宮歌合」に「元久
 元年十一月十一日当座」とあるのによる。しかし，同じく明月記11月11日
 条には

十一日，天晴，終日偃臥，乘燭以後參殿，深更退下，明後日持歌合可參春
 日由有催，輕服日数之由申了，長房善，今日一品宮渡御院御所，献出車，
 とあって定家は終日家に臥せっていて夜になって良経邸に伺候したのみで和
 歌所へ出仕した様子もなく，和歌行事の行われた形跡もない。

後鳥羽院御集には

北野社歌合之由被注尤不審

同（元久元年）十月日当座歌合

として時雨・忍恋・羈旅三首を収めており，日付に異同があるが（明日香井
 集では北野宮歌合建久元年十月とある）「当座歌合」とあるのが注目され，
 北野宮歌合に「当座」とあるのに合致し，また同歌合に衆議判とあり，（和
 歌合略目録にも衆議判とある）北野宮歌合は当座歌合で衆議判であったこと
 が知られる。とすれば明月記の記事から11日の蓋然性はないわけで，北野宮

歌合は11月10日春日社歌合後に行われた衆議判の当座歌合であったことが明らかである。⁵⁾ それでは北野宮歌合に11月11日とあるのは何故か。春日社歌合は明月記11日の記事にあるごとく11月13日に春日社に奉納された。これについて後鳥羽院御集に

同十一月十三日春日社御歌合

とあり、これから推して異例ではあるが、院は11日になって昨夜の当座歌合を北野宮に奉納せしめられたと推定するのである。

かくて北野宮歌合は10日当座三首題として給題され、後隠名当座歌合となり、翌11日に北野宮に奉納されて北野宮歌合となった。月清集に「院にて当座御会旅」(定家本に「院にて当座旅心を」とするのは定家筆写の際の恣意による変更であると考えられる)と書いたのは上記の事情による。すなわち良経は当座御会として給題された三首を詠み、何かの事情で退下し、歌合には参列しなかった。そして春日社歌合三首と共に「院にて当座御会旅」と月清集に書き入れたのではないかと推定するのである。ただどういうわけか三首中上の一首のみを記入し、題も「羈旅」を「旅」と不確かな書きかたで入れているのである。そして良経が北野宮歌合時雨・忍恋二首を書き加えたのは11月11日以後のことであるが、定家が書写した良経原本にはこの二首はもともとなかったと考えられる。というのは第一に以上のように北野宮歌合三首は凡て巻軸に位置し、一首のみが「北野宮歌合」の詞書をもたず「院にて当座御会に」とあり、定家本に「院にて当座」として入っていることから他の二首とは書入れの時期が異り、他の二首は北野宮歌合成立の11月11日以後の書入れであること。第二にもし仮に他の二首が定家本原本たる良経自筆本に

5) 愚秘抄には「元久、北野奉納の御披講には、御製講師は通具卿、読師は摂政殿勤仕ありき。」とあり、これが元久元年11月11日の北野宮歌合をさすとすれば当日良経は読師を勤めたことになるが、後鳥羽院御集に元久2年7月18日北野御歌合(祈雨当日出題摂政判有序)とあって愚秘抄の記事が同歌合をさすとはいえ確定できず、寧ろ祈雨北野歌合の方が可能性が強い。

あったと仮定して、巻軸二首を共に脱落することは書写心理から考えられないこと。第三に定家本祖本は教家本祖本と同一ではなかったと考えられること。それは定家本に亡父俊成の合点について何らの注記もないことおよび定家本に欠く七首（夏歌は二首を一首に誤記していたのであるから除外するとして）中四首が合点歌で（野遊・時雨・久恋・夕恋）四首もの合点歌を脱落することはありえず、特に北野宮歌合時雨の歌は巻軸にあってしかも合点歌であり、この歌を書き落すことは不可能に近いといえる。以上のことから定家本原本と教家本原本とは別のものではあったと考えるのであるが、定家が書写した良経自筆原本は元久元年11月10日書き入れの草稿本であったと推定されるのである。定家本奥書に「是御平生之時所被注置之本也」とあるが、これは定家が良経の月清集を完全に家集として編纂されたものとして受けとめていないことを示すものであると考えられるが、同時に書き入れなどのある草稿本であったことを示すとも考えられなくもない。

もっとも定家本は定家自身が「字誤無極，不晴覚事不能直付」と認めているように、後になって多くの疑点を感じるごとき不完全な写本であった。それは既にみてきたごとき五首（北野宮歌合二首を除外すると純粹の脱落歌と認められるのは五首になる）の脱落によっても窺われるものであるが、それ以外にも定家の恣意によって適宜書き加えられたと思われる箇所がある。それは(5)に示したように定家本は教家本にない歌数注記をもっているが、これは定家が筆写の際歌数を数えて記入したものと思われ、また(4)に示したように定家本の詞書は教家本に比して精しくなっている。例えば1487の詞書をあげると教家本では「院より八幡若宮哥合六首内羈中恋」とあるものは、定家本では「院より八幡若宮にて哥合ありし六首内羈中恋を」となっているが、これは定家が意味が通りやすいように書き改めたものと思われ、定家は手控え風の原本の詞書に手を加え、家集の詞書にふさわしいように書き改めているのである。そのために例えば前述の北野宮歌合の「院にて当座旅心を」(教家本「院にて当座御会旅」)のように原題の「羈旅」から離れる場合もあり、春日社歌合の「松風 院より春日社にて哥合の三首内」(教家本「院より春

日社哥合三首内松風J)のように事実と異った叙述にもなる場合も出てくるわけである。以上のように誤脱や必ずしも原本に忠実とは云えないと思われる箇所もあるが、後述の教家本に比して良経自筆草稿本の面影を伝えている面も多いのである。

3. 教家本の性格

定家本と教家本の最も大きな相違は教家本が定家本にない慈円・釈阿の両点をもつことである。このことから良経は元久元年11月11日以後、兩人に合点を乞うことを思い立ち、百首愚草・月清集を書写し、北野宮歌合時雨・忍恋二首を加えたと考えられる。それは久徳高文氏が指摘されているごとく⁶⁾ 釈阿発病の11月25日朝以前、すなわち24日には釈阿は加点を終っているわけで、慈円に点を乞うた時期は不明であるが、加点の状況からみて釈阿加点以後と思われるが、ともかくも教家本祖本本文の成立は元久元年11月11日以後同月24日以前ということになる。この際良経自身によって手が加えられたか否かは今日明瞭ではないが、少くも大きな手は加えられていないことは確かである。

ところで現存教家本（常縁筆本古典文庫）にはこれ以後整理の手が加わった跡が歴然とみられる。まず百首および五十首歌題について巻頭に掲げられた目次題と各内題の異同の状況を示すと次頁の表のごとくである。

すなわち教家本には傍点を付したような注記が加えられ、哥合の文字が加わっているのであるが、定家本ではそれがない。ただ千五百番歌合についてだけ、内題に

院第三度百首
千五百番
とあり、左肩に注記をもち三を墨で消して右に二と訂正しているが、これは事情をしらない後人のさかしらであって定家自身の注記及び訂正ではなかつ

6) 「秋篠月清集の成立年代」(国語と国文学昭15・2)

教 家 本		定 家 本	
内 題	目 次 題	内 題	目 次 題
哥合百首 <small>六百番</small>	調合百首	哥合百首	哥合百首
南海漁夫百首	南海漁夫調合百首	南海漁夫百首	南海漁夫百首
西洞隱士百首	西洞隱士調合百首	西洞隱士百首	西洞隱士百首
院初度御百首 <small>正治二年 千五百番歌合也</small>	上皇初度百首	院初度百首	上皇初度百首
院第三度百首	同第三度百首	院第三度百首	同第二度百首
老若哥合五十首	同無題五十首 <small>哥合</small>	院無題五十首 <small>千五百番</small>	同無題五十首
句題五十首	同句題五十首	院句題五十首	同句題五十首

たと考えられる。目次題にも二とあるが、これも三とあるものを墨でなぞって二に改めているので、定家本の原の形は注記訂正をもたないものであったと思われる。もっともこの注記訂正は比較的早い時期と思われ、静嘉堂文庫本では右の注記訂正を本文化している。定家本に「院句題五十首」とある院を加えたのは定家自身と考えてよい。

ここで注目したいのは教家本の歌合についての訂正である。特に院無題五十首を老若哥合五十首とするのは、建仁元年2月5日に院から五十首歌を召され、後鳥羽院御集によると同月16・18日両日評定あり勝負付がなされたもので新古今入集歌の多い極めて重要な歌合であるが、拾遺愚草(中)にも

院五十首 建仁元年春

春日応太上皇製和歌五十首

とあり、定家本の題が良経原本の形であったと考えられる。何故このように改めたかと云うと、それは教家本の歌合歌の勝負付に関係があると思われる。この勝負付を記したのは教家本奥書に

承久三年十一月廿六日書写早

此合点者前大僧正积阿入道兩人之点也

不可有他見欵 権大納言藤原御判

とあって次に歌合勝負数の合計を記しているところからみて当時の権大納言

藤原、つまり教家であったと考えられる。(教家は建保6年12月9日権大納言正二位となり嘉禄元年9月3日出家により辞任している)教家は父良経の家集を整理する意識をもって詳細に歌合などを見合せ勝負付を記したものと恐れ、目次題の南海漁夫^{うし}^あ合百首、西洞隱士^{いん}^し合百首を付したのも同様の意図からと思われる。

こうして集を解りやすいものにしようとした教家の意図は哀傷部1567の詞書にもあらわれている。すなわち定家本では

なをありしかとも忘るおなほころ三位入道のもとより

とあって極めて主観性の強い詞書であるが、教家本では

権中納言道家母うせたまひてのちおなほころ三位入道のもとより

となっている。この歌は正治2年7月13日の良経の妻であった入道権中納言能保女の死後の俊成との贈答歌でこれは新古今集卷八哀傷部の

権中納言道家母かくれ侍りにける秋、摂政太政大臣のもとへつかはしける

皇太后宮大夫俊成

の詞書によったもので、教家は道家と同腹の兄弟であり(公卿補任)亡き母へのおもいが「うせたまひてのち」の尊敬表現をとらせたものといえる。

詞書の異同についていえば神祇部「伊勢にて」の二首の後に定家本では「述懐の中に」の詞書があるが教家本にはみえない。この歌は

伊勢鳴やしほひもしらす袖ぬれていけるかひなきよにもふる哉

で伊勢にて二首に続いており、整理の意味で削除した可能性も考えられる。

続後撰集卷十七雑中には「述懐の歌の中に」とある。同様に「夢中述懐」の二首目に「述懐」とあるのも削除の可能性が高い。

異同の(3)ウに掲げた定家本における重出歌二首も教家によって削除されたのではないと思われる。この歌は定家本によって建久6年作となるが、慈円は建久3年権大僧正に任せられ、座主および護持僧に補せられた後のことで多忙で絶えて会う機会もないことを嘆いた定家本秋部の歌の方が贈答のものと歌と考えられるが、第四句が「人もなき世の」とかえられて無常部に入れられたことによって歌意は複雑となり、慈円・釈阿共に合点を付けてい

る。教家は重出歌に気づき両点をもつ無常部の歌を残し、秋部の歌を削除したのではないかと考えるのである。

もっとも(4)詞書の異同 2 に掲げた定家本祝部の巻軸にある

不審^素入高陽院初度御会に

が教家本にないのは、定家本祖本にもともと歌は記されていないかと思われ、この詞書を削除したのは教家ではなく良経自身であった可能性が考えられる。

現存教家本には134カ所に互って校異が記されている。このうち定家本に一致する箇所が67あり、他の52カ所は定家本その他どの伝本とも完全に一致するものがない。従って定家本との校合とは考えられないわけで、いかなる異本による校異が不明であるが、或いは教家が前述の如く歌合を詳細にみていると思われるところからその際の校異の可能性も考えられるが、未調であるので可能性の指摘にとどめておきたい。

以上のようにみえてくるとき、定家本における「百首愚草」「式部史生秋篠月清集」という集名を「式部史生秋篠月清集」上下と統一したのは良経自身ではなく教家であったと推定してもよろしいのではないかと考えるのである。勿論良経が慈円釈阿に合点を乞うために書写した際に集名を統一した可能性もないではないが、良経に整理の意識は殆どなく、教家の整理の意識は明白である。もっとも教家の整理は集組織や歌の部類を変更するといった抜本的なものではなく、集を理解しやすく注記を施し、勝負付を記し、不合理の箇所を正すといった方針によって貰ぬかれている点は注意しなければならないが、ともあれ、教家の整理によってかえて良経原本の形がゆがめられていることは明らかで、この点では定家本が良経草稿本の面影をとどめているといえよう。

ただ定家本は定家自身が識語で認めているように誤りが多く、この点で教家本の優位性は認めなければならぬが、それでは教家本が本文の面で絶対的優位性を持ち得るかというに必ずしもそうは云えない。例えば句題五十首97・5山家月は教家本では

新古今集

古典文 庫番号	教家本	定家本	新古今	備考	教家 本	定家 本
74	秋の夜に	秋の夜の	秋の夜の		×	○
"	松のかせかな <small>かけイ</small>	まつのかせかな	松の風かな	書陵部本傍墨「ケカ」みせ けち朱点	⊙	○
298	風にまかせて <small>まさイ</small>	かせになかめて	風にながめて	<small>ナカメイ</small> 書陵部本「風にまかせて」	⊙	○
337	かはるらん	かはらむ	かはらん		⊙	○
340	いまはの心	いまはのころの	いまはの比の	<small>いまはのころのイ</small> 柳瀬本「いまはの心」	⊙	○
387	うちぬるひまも	うちぬるよひも	うちぬるよひも		×	○
466	秋かせに	秋かせに	又もこん		⊙	×
"	契たのむの <small>秋をイ</small>	ちきりたのむの	秋をたのむの		⊙	×
544	いはまにのこす <small>まよふイ</small>	いはまにまよふ	岩まにまよふ		⊙	○
710	むす苔の	むすふ苔の	むす苔の		○	×
738	待ける庭の <small>よはイ</small>	まちけるよはの	待けるよはの		⊙	○
760	ささのほら	ささのはは	ささの葉は		×	○
760	こほれる霜を	こほれるつゆを	氷れる霜を		○	×
774	よる舟の	ゆくふねの	よる舟の		○	×
823	まつとせしまに <small>夜なからにイ</small>	まつよなからに	待つ夜なからに		⊙	○
918	沢へにしける	のさはにしける	野沢に茂る		×	○
934	たえたえかかる <small>イこほる</small>	たえたえこほる	たえたえ氷る		⊙	○
972	よなよな庭に	よなよなにはの	よなよな庭の		×	○
1018	雪とたに見よ	ゆきかとも見よ	雪とたにみん	雪かともみよ <small>柳瀬本 八代抄</small>	×	⊙
1114	ときしあれば <small>ヤイ</small>	ときしもあれ	時しもあれ	雪とかもみん <small>よ (書陵部本)</small>	×	○
1122	と山かいほの	とやまのいほの	と山の庵の		×	○
1212	なくなく月に	よなよな月に	夜な夜な月に		×	○
1383	五月雨の空 <small>イ比</small>	さみたれのころ	五月雨のころ		⊙	○
1412	色はみえける	いろはこもれる	色はこもれる		×	○
1567	夢のうちは <small>に</small>	ゆめのうちは	夢のうちは	(後成詠)	⊙	○
1568	我身哉 <small>こそイ</small>	わか身こそ	我身こそ		⊙	○
1568	とはるるけふは	とはるるけふも	とはるるけふも		×	○

新勅撰集

古典 文庫 番号	教家本	定家本	新勅撰	教科 本	定家 本
220	うき嶋かはら	うきしまのはら	うきしまのはら	×	○
415	かすみの空に	かすみのそこに	かすみのそこに	×	○
590	いまはむすへき <small>すい</small>	すまはすむへき	すまはすむへき	⊙	○
727	ちきるらん <small>りなんイ</small>	ちきるらむ	ちきるらん	⊙	○
727	さみたれのころ	ありあけのころ	ありあけのころ	×	○
1333	さひしきは	さひしきは	さひしきは	×	○
1363	関こえて	やまこえて	せきこえて	○	×

月見はといひしはかりの人はこてつれなくとはぬ山のおく哉とあり、左下に「下句不重」右に「新古にまきの戸たゝく庭の松かせ」と注し、上に「新古」の集付けを付しているが、注は後人の付したのものとして第三句は定家本に「みやこ人」とあるのが正しい。新古今入集歌「月見ばと」の歌は正治2年院初度百首749の歌でかえって重出歌を作るといふ混乱をおこしているのである。また両本の異同(3)(7)に掲げた定家本にあって教家本にない「秋のくれに」「春のはしめに」二首は教家本の脱落と考えられる。「あらたまの」の歌は後京極殿御自歌合春部一番立春左歌であって自歌合二百首は凡て月清集に収められている。

また両本で異同ある歌で新古今・新勅撰両集に入集しているものが新古今入集歌七九首中二三首(27カ所)新勅撰集入集歌三六首中六首(7カ所)ある。その異同を表示すると上記の表のごとくである。

以上の表によっても明らかなように、新古今集入集歌で異同ある歌27カ所中21が新古今歌と一致するのに対して教家本の一致は6、校異および異本によって一致するもの10カ所で定家本の方が圧倒的に新古今集歌に近いのである。また新勅撰入集歌についても定家本の一致6に対し教家本の一致は2カ所、校異による一致1カ所でこの傾向は更に顕著である。もっとも新勅撰集については撰歌にあたって定家は手許の定家本月清集を使用したことも考え

られ、それを考慮に入れる必要があるが、ともあれ教家本本文が定家本本文に比して優れているとは云えず、かえって定家本本文が教家本よりも優れている面をもつことが明らかである。

かくして秋篠月清集については教家本・定家本のそれぞれの性格と限界をはっきりさせた上で祖本の溯源と厳密な本文校訂がなされなければならぬと思うのである。

4. 伝本受容の問題

定家本・教家本が以上のように大きな異同を内蔵して月清集の二大系統本をなしてきたために、それ以後の伝本はいずれかの系統本に属することになるが、当然二系統校合本の出現を招き、かなり早くから月清集には校合本が作られたであろうことは推察にかたくない。伝本推移の過程について例えば松田博士のとられた諸本の組織形態の状況をもてははっきりと把握できる。例を集組織の面からみると、既に述べてきたごとく定家本は百首愚草と式部史生秋篠月清集（上下）とし、教家本は全体を式部史生秋篠月清集と名づけ定家本の百首愚草に当るものを上とし、式部史生秋篠月清集（上下）を下とした。

宮内庁書陵部蔵六家集御所本（1冊・江戸写、整理番号501 511）は目次題をもたず本文花月百首から始まるが、南海漁夫百首の前に

式部史生秋篠月清集上下

とあり、春部の前に

式部史生秋篠月清集下上

祝部の前に

式部史生秋篠月清集下下

とあって教家本上下をさらに上下に分けている。これと同じ組織をもつものに陽明文庫蔵月清集（4冊・江戸写）があり、表紙に「月清集上々」以下「上下」「下上」「下々」と記し、内題では第1冊に「式部史生秋篠月清集

上^上」とあり、以下各冊巻頭に「式部史生秋篠月清集上下」「〃下上」「〃下下」の如く記している。これらは定家本が月清集を上下に分けているところから百首および五十首歌を収めた部をも上下に分けているわけである。

鳥原・松平文庫本（2冊・江戸写）は書陵部蔵桂宮本（2冊・江戸写・511・3）の幽斎校合本と同じ系統の転写本であるが、極めて錯雑した題をもっている。題籤は「月清集上」「〃下」とあるが、内題は

式部史生秋篠月清集上

百首愚草

と記し、上巻には他に内題はないが、下巻の春部の巻頭には

式部史生秋篠月清集^上

また祝部の前に

式部史生秋篠月清集^下

と記した後に消す符号をつけているのであって、これは教家本と定家本の混合である。すなわち教家本に上とあるのに従って上としたが、定家本が祝部以下を下とするので春部以下を中とし、後で教家本に従って下とし、祝部の前の内題を消しているのである。

書陵部蔵月清集（2冊本・江戸写・151 424）は題籤に「式部史生秋篠月清集上」「〃下」とあるが、内題には「式部史生秋篠月清集一」「〃二」「〃三」「〃四」となっており、書陵部御所本や陽明文庫本にみられた「上上」「上下」「下上」「下下」とあるものを「一」―「四」に整理したものであって、これが固定化していった六家集板本の部類となったと思われる。

以上のように集組織の名称をとり上げても教家本・定家本以後の伝本推移の過程を想定しうるのであるが、内容においてもこのことは確かめられるのである。もっとも定家本・教家本の校合といっても大体は教家系統本を底本にして定家系統本で校合するのが一般であって、定家本を底本に教家本で校合したものは極めて稀である。その稀な一本に京大図書館蔵六家集（1冊・近世写）がある。この本の集組織は特異であって題籤に「月清集」とあり、

内題は「式部史生秋篠月清集」とあって春部以下冬部まで四季部を収め、次いで内題に「百首愚草」とあり、花月百首以下句題五十首を収める。次に「式部史生秋篠月清集下祝恋雑」とあって祝部より釈教部までを収める。つまり定家本の「秋篠月清集上」の次に「百首愚草」が割り込み、更に「下」が続くという組織なのである。奥書には

本云是御平生之時所被注置之本也、夢後書留之、粗一見了、御本忿返上之間、不見中書之草、字誤無極不晴覺事不能直付

安貞二年五月二日

承久三年十一月廿六日書写早

権大納言藤原御判

とあって定家本奥書と教家本奥書を併記している。このことがこの本の性格を示しているが、本文は定家本系統本文に教家本系統本文が混っていて厳密な校合本とは言い難い。

ここで後世の流布本たる六家集板本に大きな影響を与え、また厳密な校合を施し、校訂本の性格をもつ意味で注目したいのは書陵部蔵1冊本（室町中期写、464・29）である。題籤には「秋篠月清集全」とあり、伝足利義政筆、東山文庫の印がある。底本は教家本系統で慈円・釈阿両点をもち（もっとも教家本と比較すると朱墨点を欠いている箇所22があり、逆に教家本にない歌に点がついている箇所が12あって必ずしも正確とは言い難い）集付も教家本に記したものを記入している。本書は教家系統本を底本にして定家本で校合し、取捨を決めているが、その特色を纏めると

(一)教家本・定家本の歌の出入りの処理

(ア)定家本にあって教家本にない歌

秋部1266の前の「なか月の」の歌を小書きして書き入れている。（書陵部本151・424および六家集板本にあり）

神祇部1584の前の「あらたまの」の歌は本書では1584の後に本文化している。但し歌頭に後イ初イの符号を記して定家本の順序を明示している。（書陵部同本および板本同じ、但し符号はない）

(イ)重出歌の処理

秋部1206の前に定家本にある「内大臣の事侍けるころ無動寺法印のもとへつかはしける」の詞書をもつ贈答歌二首が書き入れられ、次の注記をもつ「此二首定家本ニ書入之、但哀傷部ニ入イニアリ」これは松沢氏が指摘されているように無常部の間違いである。この注記は書陵部151・424および板本にもそのまま踏襲されている。ただし「イニアリ」はない。

(ウ)教家本にあって定家本にない歌の処理

- 1131 旅月聞鹿「定本此題哥コ、ニハ無シ」
 (書陵部本151・424, 板本にも注記がある)
- 1294 寄歳暮恋「定家本此題哥此所ニ無シイ」
 (書陵部同本, 板本には注記なし)
- 1340 北野宮哥合時雨「定本此題哥不入也」
 (書陵部同本, 板本には注記なし)
- 1417 北野宮哥合久恋「定本ニ不入」
 (書陵部同本, 板本には注記なし)
- 1464 北野宮哥合忍恋「定本ニ此題哥不書之如何イ」
 (書陵部同本, 板本には注記なし)

のごとく注記している。もっとも 静嘉堂文庫本に存する306野遊・1444夕恋には何の注記も施していない。これによってみると校合に使用した定家本は或いは静嘉堂文庫本系とも考えられるが断定はできない。それは1090夏歌について

たつ春をそれもをもくやおもふらん巖夏なる天のはころもイニナシ
 三夏ハ猶^くそれもをそくや思ふらん^敷 杣山川をおろす筏士イニ如此
 此歌可然敷

と小書きしており、教家本の歌を先に書き、次に定家自筆本の歌を記して定家本の歌を肯定し、次の1091の「うき枕」の歌を除いているのである。そして書陵部本151・424および六家集板本は右の本文に従って

夏はなをくれもをそくや思ふらん杣山川をおろす筏士

として、1091の歌を除外しているのである。

(⇒)本文異同及び詞書異同の処理

上のような欠歌の処理の仕方は本文異同や詞書の異同についても同様である。歌の語句の異同について云えば例えば二夜百首158の歌は

なをかよへうつの山辺のうつゝにはたえにしなかの夢の^{ちばかりを}通^ち

とある。下第五句は教家本は「夢のかよひち」定家本は「ゆめちはかりを」で、本書は定家本をよしとしているのであって、書陵部151・424および六家集板本は「夢ちばかりを」となるごとくである。

また詞書について一、二例をあげれば春部1011の詞書は

院撰哥合十首内霞^{隔遠}繞樹

となっており、これは教家本には「霞繞樹」定家本は「霞隔遠樹」で定家本の方を採用し(歌合原題は霞隔遠樹)、書陵部同本、板本もこれによって「霞隔遠樹」となっている。また春部1017の詞書は

「^{春イ}曉霞隔暮山」とあり、これは教家本「曉霞隔暮山」定家本「曉霞隔春山」で書陵部同本・板本とも「曉霞隔春山」となっているごとくである。

また定家本・教家本両本の比較で述べた教家本になく定家本のみにある詞書については

(1) 1255の作者名「中宮大夫」を記入している。

(2) 祝部の巻軸の「^{未書入}不^書高陽院初度御会に」の詞書は恋部の巻頭に移され

高陽院初度御会に恋哥よみけるに

と恋部の最初の詞書と合されている。(書陵部同本・板本も同じ)

(3) 雑部1528の前にある定家本の「述懐」の詞書が記入されている。(書陵部同本・板本同じ)

(4) 哀傷部1567の詞書

権中納言道家母うせたまひてのちおなしころ三位入道のもとより

には右肩に定家本の詞書

猶^{あり}しか^かとも^も忘^るトイニアリ

を書き入れ、消す記号をつけている。(書陵部同本・板本に注記なし)

- (5) 神祇部**1582**の前にある定家本の「述懐の中に」の詞書を右肩に小書きして

述懐の中にイニ此アヒニ題如此アリ

と記し、イ以下の注記を後で墨で消している。(書陵部同本・板本詞書あり、ただし注記なく位置も**1583**の歌の前にくる)

- (6) 神祇部の「日吉七社」の詞書にある定家本の「本地」は本書では「本地イ」と注記し、書陵部同本・板本では「日吉七社本地」となる。

(⇒)歌の排列順序の異同の処理

教家本と定家本は3カ所排列順序を異にしている箇所がある。このうち(1)**82**「ひとりねの」の歌が**92**の次にくる定家本の異同についての注記はないが、(2)**1075**「きく人の」と**1076**「わきてなけ」の排列順序の異同は歌頭に「後イ」「初イ」と注し、(3)**1488**「わするなど」が**1084**の次に入る異同については傍線をひき「イ」の符号をつけている。(書陵部同本・板本はいずれも注記なし)

もっとも本書が教家系統本を底本としているとは云え、その底本は常縁筆教家本とは多少異なった本文になっており、例えば花月百首の巻頭歌は

むかしたれかゝる桜のたね^{花イ}をうへてよし野を春の山となしけん

となっており、これは教家本・定家本とも「花をうへて」であって、書陵部同本および板本では「桜の種をうへて」という本文になるのである。

また歌の排列順序についても教家本とは異なるものがあり、二夜百首の鹿五首・擗衣五首はその位置を逆にしてしている。もっとも題の下には「後イ」「前イ」の符号を記す。(書陵部同本、板本には注記はない) その他**382**と**383**・**754**と**755**・**1022**と**1023**(後イ・初イの符号あり、書陵部同本・板本なし)**1207**と**1208**(後イ・初イの符号あり、書陵部同本・板本なし)のごとく5カ所で教家本・定家本とも排列順序を異にしている。

かくして書陵部蔵1冊本(464・29)は常縁筆教家本とは歌の排列に若干の異同があり、歌の字句に多少の異同があるとは云え、教家系統本の比較的

善本を底本として定家系統本によってかなり厳密に校合しているのみならず、両本を比較し取捨することによって校訂本を目指していたことが明らかである。本書は伝足利義政筆の極めをもつが、奥書はなく、確かなことは不明である。ただ教家本と定家本両本が同時に見得る立場に居た点を考慮すれば、教家本奥書に冷泉為尹の名が見え、静嘉堂文庫本奥書の極めに冷泉為広の名が見えること（為広は為尹の孫に当る）から考えて或いは冷泉家の誰人かの手によってなされたのではないかと推察されるが、推察の域を出るものではない。ともあれ本書は以後の月清集伝本に大きな影響を与え、その本文を伝え、慈円釈阿両点・勝負付・巻頭目録・集付等を除外し、巻序も1—4と簡略化した書陵部本151・424のごとき（ただしこの本は欠歌もあり、細部に若干の字句の異同もあり直ちに六家集板本の底本になったわけではないが）ものを経て、六家集板本「月清集」が刊行され、流布するに至るのである。

本稿を草するにあたって閲覧を許された宮内庁書陵部その他の各図書館、文庫ならびに御教示を頂いた有吉保、築瀬一雄両氏に感謝します。なお本稿の前半は昭和44年11月23日の中世文学会で「秋篠月清集について定家本と教家本の性格」として口頭発表したものである。